ISSN 1344-5561
京都府立大学図書館報
なからぎ
１７７号
２００６年10月

大人になるということ

学生部長　宮　嶋　邦　明

大人とこどもの違いは何だろう。経済的に自立するとか、20歳になるとか、大人の身体になるとかなどではない。心の面で、両者を分かつものは何かということである。青年期が子どもと大人をつなぐかけ橋だとすれば、青年期の心にこの問いを解き明かす鍵があると私は思う。

周知のように青年期は、心の中に自分を見つめる「もう一人の自分」の誕生とともに始まる。いわゆる自我のめざめである。奇跡ともいえるこのできごとによって、子どもは自分自身との対話を開始し、自分の内面世界を築いていく。エリクソンによれば、青年期の最大の特徴は自己定義を求める心だという。「私はいったい何ものか」という問いがめばえ、模索の中で、その答えを見出そうとするのである。

むろんこの時期において、自己定義がうまくできる者もおれば、それが混乱したり拡散したり、はたまたそれを留保したりする者もいる。大人への歩みは平坦ではないとエリクソンはいう。しかし自己定義ができるかどうかはたいしたことではないと私は思う。自分のアイデンティティーなど、その後の生活でいくらでも変貌の可能性があるからだ。

重要なことは自分が対象となることそのものにある。自分を対象として自分について考えるということは、自分の生が「自覚的」になることを意味する。いいかえれば、それまでの「無自覚的」な生を、自らの意志で選び直し仕立て直すことを意味している。その意味で子どもはこのときはじめて自分の生の主人公になるといってよい。

それまでは子どもは自分の生を主人公としては生きてはいない。なぜなら自分の生を「自覚」していないからだ。「自覚」のないところで、どうして自らの生を能動的に生きることができようか。途方もない「偶然」の積み重ねの中で、子どもは今を生きる。子どもにとって世界は所与のものである。そして子どもは、そのことすらも、知る術がない。

「大人か子どもか」という質問に、「自分は大人だと思う」と答えたある学生は、その理由を、「自分の生活が管理できているから」、「自分のことは自分で決めているから」などと述べた。ここには「偶然」の生から脱けだし、能動的な生へと向かう「子ども」の姿がある。「無自覚的」で受身的な生から、「自覚的」で能動的な生へ、ここに子どもの心と大人の心を分かつ核心があると私は思う。

「静寂に聞き入るようになったとき、子どもは青年期にはいったのだ」といわれる。自分との対話は静寂を求める。図書館がそんな空間であるのは紛れもない。その空間の中で何ものかにうちこむ学生の姿を見ると、その姿に、自分の生を能動的に生きようとする「大人」の姿が重なる。

（みやじま　くにあき　福祉社会学部教授）

西岡常一『木のいのち 木のこころ』（草思社、1993年）

図書館運営委員　服　部　敬　子

ふらりと入った本屋で装丁に惹かれてこの本を手にとったのは、私がまだピカピカの大学院生の頃だった。パラパラと中をめくってみると、「今の人にそんな時間の感覚がありますかいな。もう目先のことばかり、少しでも早く、でっしゃろ。」といった語り口調の大和弁が目にとびこんできた。あとがきに、薬師寺の仕事場や西岡氏の自宅、時には入院先の病室に１年半ほど通って聞き書きしてもらった、とある。私は奈良生まれで、牛乳と言えば「いかるが牛乳」、写生大会と言えば法隆寺の五重塔を描きにいくような土地柄で育ったものだから、他界した祖母の語りや原風景を彷彿させるこの本をともかく買って帰ることにした。

自ら「斑鳩大工」と記す西岡常一氏は、法隆寺金堂や薬師寺金堂など、豊富な檜を使って堂塔の復興を果たした最後の宮大工棟梁である。「木に生き、木を生かす名匠」として名高い。仏閣や建築の歴史にさほど興味があったわけではないが、非日常のエピソードが私には新鮮だった。たとえば、ある堂に隅木（軒の端を支える大事なところ）を入れるとする。そこに使う木を見て西岡が、「この木は少し弱そうだから少し上げておく、この木は強いからそのままでええ」ということを言う。すると、建築学者も設計士も、そうやったら設計図の寸法と違う、と言う。「しかし、木は生きているんです。計算通りにはいかんのですわ。一本一本、木の性質は違いますわ。そりゃ、そうですわ。人間と同じです。…（中略）…それをみんな同じものだとして計算して、そのうえ目の前で設計図通りに仕上げればいいと思うてますやろ。」「私ら檜を使って塔を造るときは、少なくとも三百年後の姿を思い浮かべて造っていますのや。三百年後には設計図通りの姿になるやろうと思って、考えて隅木を入れてますのや」。300年後かあ…宇宙人に見せて自慢できるかもしれへんなあ…。

法隆寺金堂の復元にあたって、学者と論争になったという。当時、上層の屋根がどういう様式のものだったかについて学者たちに間には定説があったのだが、大工の立場から考えるに、それを造るには無理があると言わざるを得なかった。しかし学者たちはそれを認めようとしない。そこで、西岡自ら屋根裏に投げ込まれてあった廃材を見つけてその断片の一つ一つを念入りに調査し始めた。何の部材でこうなったのか、組み合わせを考え調べ上げて「この形式はこういうものやった」と説明した。すると、誰も反対はしないものの、「私らが間違っていた」とは決して言わない。論争になると学者は、「この時代はこういう様式のはずや、あの伽藍はこうやったし、ここはこうやったからこうあらねばならん」というようなことを言う。「これじゃ、あべこべですな。先に様式を考えているんですな。そうじゃなしに、現にある、廃材の調査からどんなものだったのかを考えなならんのですよ。自分の考えの前に建物があったんですからな」。研究者を志してフィールドワークを始めた時期の私の胸に、がつ～ん！と響いた話だった。

祖父の代から法隆寺の棟梁を担ってきた西岡家で、常一氏が小学校を卒業するときのこ

と、先の進路を決めるときに、おじいさんは農学校へ行けといい、親父さんは「これからの大工は設計も製図もみんなせないかんさかい」工業高校へ行かしたらどうかと言った。おじいさんに逆らうわけにはいかず、農学校に行くことになった常一少年だったが、苗代に麦の草いけ、肥え担ぎ…「そこらの百姓のおっさんと同じでっしゃろ。何でこんなことせなならんかと思うて」勉強もしなかった。おじいさん曰く、「土の命をしっかり見てこないかんよ」。結局、その意味がわかったのはずっと後になってから、棟梁になってからのことだった。地質のことや土壌のことが発掘調査のときに役立ち、林業も学んだことで、山を見て木を買うにしてもよくわかったという。大学時代の恩師であり、独自の人間発達の理論を構築して「発達保障」論を提唱された故・田中昌人氏がよく言っておられた、「よき回り道もして」という言葉につながった。

法隆寺の大工に代々伝わる口伝のいくつかを紹介しよう。「堂塔建立の用材は木を買わず山を買え」。「木は生育の方位のままに使え」。すべての木には生える場所によって「癖」ができる。例えば、山の南斜面に生え、西からの風が強い場所に育った木の南の枝は風に押されて東に捻れる。すると、何とかして元に戻ろうとする性質が生まれてくる。こうした木が伐採され製材されてから買うのではなく、自分で山に入って地質を見、環境による木の癖を見抜いて買えということである。そして、山ごと買った木をどう生かすか。例えば、山の中腹以上峠までの木は、日当たりもいいが風も当たる、嵐にもうたれるという環境で育っているから木質が強く癖もまた強い。よって、建物を支える骨組みになる部分に使うとよいという。一方、谷は水分も多く養分も十分にあり光も嵐もそれほど強くはなく木は素直に育つ。癖がない代わりに強さもないから長押や天井などの造作材に使えというのだ。南に育った木には枝があるから、たくさん節ができる。実際、法隆寺の飛鳥建築でも薬師寺の白鳳建築でも南正面の柱には「一間六節」という言葉通り、一間の間に6個も7個も節が見つかる。こうした知恵が1300年もの命を持たせているのだという。それが、便利で細かい仕事ができる道具が出てきた室町時代になると、正目や節のない材といった不自然なものが集められ使われるようになった。それらは丁寧に組んであるが、600年も持たなかったのだ。

「塔堂の木組みは寸法で組まず木の癖で組め」。左に捻れを戻そうとする木と右に捻れを戻そうとする木を組み合わせて部材同士の力で癖を封じて建物全体のゆがみを防ぐのだ。法隆寺の五重塔や金堂を解体したときにこの口伝が完璧に守られているのを感じたという。1300年たっても五重の軒先を一直線に持たせている秘密がここにあった。「癖があるからいうて、その木をはじいて使わんというのは、もってのほかでんな。人間と同じです。癖は生かして使うてやるのが勤めですわ」。また、職人たちも木と同じように癖がある。自分に自信があるから頑固で人のいうことを簡単に聞かない。早い遅いも、それぞれの得手不得手もある。棟梁はこの人たちをまとめなければならない。「木の癖組みは工人たちの心組み」。「その人はそれでちゃんとした職人ですし、性根というのは直せるもんやないんですわ。やっぱり包容して、その人なりの場所に入れて働いてもらうんですな」。

西岡氏はこの語りの1年半ほど後に亡くなっている。私が本書と出会ってから干支も一回りした今年の6月、編集に関わって『人と生きる力を育てる―乳児期からの集団づくり』（新読書社）という本を上梓させていただいた。『オレ様化する子どもたち』『他人を見下す若者たち』といった本が版を重ねるご時世にあって、子どもたちの「癖」形成過程に付き合いながら、「癖組み」「心組み」の方法を300年後を見据えて(?!)追究し続けたいと思っている。

（はっとり　けいこ　福祉社会学部助教授）

ご紹介の『木のいのち木のこころ　天・地・人』 草思社1993－1994年刊（請求記号526.18//N//1～3）は2階閲覧室入り口の新着図書コーナーに配架していますのでご利用ください。

蔵書点検が終わりました

８月12日～８月31日の間に２階閲覧室を休室して、所蔵していることになっている資料が本当にあるのかどうかを確認する作業（蔵書点検）を行いました。それと合わせて、資料が探しやすくなるように館内の整備も行いました。その結果を報告します。

１．蔵書の所在確認を行いました

２階閲覧室内の図書43,247冊について点検したところ、今年度は55冊の紛失が確認されました。入室時のマナーをカウンターでこまめに呼びかけるようにしたためか、昨年度より紛失冊数は減っています。しかしあいかわらず授業･レポートでよく使われる図書が紛失していたり、全く違う場所に戻されていた例もありました。どの図書も府大の大切な資料だということを念頭において図書館を利用してください。

２．OPAC(オンライン蔵書目録)上で「教職･教科書」資料の所在がわかりやすくなりました

「教職･教科書」資料は一般図書とは違うコーナーに別置されています。（トイレ前の書架）しかし、OPAC上ではこれまでは「開架」と表示されていたため、一般図書の教育関係の書架と「教職・教科書」コーナーの二ヶ所を探す必要がありました。これからはOPACの所在に表示された場所を探してください。

３．参考図書コーナーに棚見出しを入れました

春のリニューアルにはできなかった棚見出しを作りましたので、辞･事典類を探す時の目安にしてください。

４．インターネットコーナーのパソコンが４台新しくなりました

後援会から寄付をいただき今回更新することができました。頻発していたフリーズもなくなると思います。不正プログラムのインストール等に対処するため、システムの「復元」機能導入等セキュリティも強化しました。

なお、蔵書点検はこれまでは年によって日程がまちまちでしたが、授業や試験に配慮して来年以降もこの期間に実施する予定です。

’06オープンキャンパス開催される

７月29日(土)、７月30日(日）の両日オープンキャンパスが開催されたました。

図書館も開館して参加者の見学の受け入れをしました。

全体の参加者は、土曜日・日曜日ということもあってか高校生1,563人、保護者等814人の計2,377人で昨年の2,678人から301人減少したものの多数の参加者がありました。

各学部のガイダンス、「大学の授業を体験してみよう」と題する模擬授業が開講され、学科アラカルトでは相談コーナー、学科紹介、研究室ウォッチング、学科懇談会に開催されるなど盛りだくさんのプログラムの合間を縫って、図書館へは昨年の12％減ではありますが第１日目294人（うち保護者等50人)、第２日目202人（うち保護者等52人）計496人（うち保護者等102人）の方にお越しいただきました。例年文系学部のオープンキャンパス参加者の来館が自然科学系の参加者に比べて図書への興味が多いのか２割程度多くなっています。

参加者の中には、閲覧室の書架を興味深く見て廻ったり、本を取り出して座席で熱心に読書する姿がありました。

一方では、今年度も時間がないのか入口でそーと覗いて帰るグループやざっと書架の本を眺めて帰っていく高校生もありました。

昨年同様、受付カウンターの職員も何か手持ちぶさたの感がありましたが、無事終了しました。

図書館日誌

附属図書館運営委員会ワーキンググループ会議開催報告

６月20日開催の平成18年度第１回の附属図書館運営委員会で選書･電子ジャーナル･自己評価の３つのワーキンググループの継続とメンバーを確認し、次のとおり会議を開催しました。

◆　選書ワーキンググループ会議

７月13日に附属図書館３階の控室で開催されました。

前回３月の会議で学生（学部生を中心とする）に対する自主的な「学び」と「しらべ」の支援を基本としつつ多様な読書要求にも応えられるようにする。(「教育・学習支援機能」)講義(教育課程)で紹介されている単行書レベルの参考資料の全点購入を目指すことを確認しました。

今年度は、確認事項を基本として、学習的機能を果たすための資料である「各学科の基本的な図書」(テキストは除く）について、９月末日を期限として教員から10点を目途にリストを提出してもらう。附属図書館は、①図書館蔵書を考える。②学生の資料要求をふまえる。③参考図書を充実する。④息の長い資料に配慮する。等の選書方針で選書することが決まりました。

◆　電子ジャーナルワーキンググループ会議

○７月10日（月）に本館２階の応接室で開催されました。

前回３月の会議で平成19年度新規導入候補として「Academic Seach Elite」から「Academic Seach Premier」への移行、新聞データベースを検討をすることの確認。平成18年度継続購読の「SpringerLink」「Academic Seach Elite」の経費が「全学共通教育研究費」で概ね確保できたこと、学長からは大学の電子ジャーナルの構築を附属図書館で検討してもらいたいとの要望がだされたことが報告されました。

○８月６日（金）に附属図書館３階控室で第３回の会議が開催されました。

平成19年度購読電子ジャーナルについて、「Academic Seach Elite」から「Academic Seach Premier」への移行については経費負担のルール化を検討する必要があり、引き続き検討をしていくこと。新聞データベースについては読売新聞の「ヨミダス文書館」を購読する方向で検討すること。新規電子ジャーナル等の導入については、学部長から附属図書館長あてに提出願い、ワーキンググループで検討をすることを決定しました。

今後、要望の強いScience Directを含め本学の電子ジャーナル構築に向けて、導入指針・基準作り、経費負担のルール化について協議していくことになりました。

◆　自己評価ワーキンググループ会議

７月５日（水）に附属図書館３階の控室で開催されました。

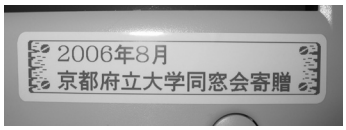
全学自己評価委員会の動き、第三者評価準備委員会の動きや現在大学を取り巻く、公立大学法人化、学部再編等の大学改革、３大学連携、教養教育の改革の動きについて報告。本年３月に科学技術/学術審議会学術分科会研究環境基盤部会科学情報基盤作業部会から「学術情報基 盤の今後の在り方について（報告)」がだされている。これは３部からなりその中に「学術情報 基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方について」がありこれらを踏まえ、現状と課題 を認識し、図書館のあり方等建替えを含めた将来計画を検討することを確認、今後必要に応じて 会議を開催していくことを決定しました。

閲覧室のインターネットコーナーのパソコン 同窓会からのご寄付で４台を更新しました

閲覧室の図書検索・インターネットコーナーのパソコンは、京都府立大学同窓会から８台、府立大学後援会から２台の寄贈をいただき利用してもらっております。

最近、フリーズしたりして少し調子が悪いパソコンがありました。

京都府立大学同窓会（会長 國松豊氏）に相談しましたところ、後輩の教育・研究に必要ならと30万円をご寄付していただくことになり、パソコンを４台の更新と共に、これまでの課題であったセキュリティ対策としてアルプスシステムを導入させていただきました。



パソコンの更新等は閲覧室休室中の８月29日に終了し、９月から使用してもらっています。

最終的には、寄付金額を１万８千円程度オーバーしましたが合わせてご寄付いただきました。ありがとうございました。

延滞図書の返却について（強いお願い）

図書の延滞者が多く困っています。返却期限が過ぎた図書は至急返却をお願いします。

本学の図書館には延長の回数制限はありません。予約が入らない限り、何度でも延長が可能です。延長希望図書と利用カードをカウンターへお持ちください。（ただし、他の本が延滞している場合は延長できません。）

なお、貸出し中の図書を紛失･毀損した場合や、何を借りたか定かでない場合も図書館カウンターへお越しください。

カレンダー

2006年10月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2006年11月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	*10*	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	*22*	23	24	25
26	27	28	29	30		

2006年12月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	*25*	*26*	*27*	28	29	30
31						

【10/2(月)～通常貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限２週間以内）】
【10/9(月)〈体育の日〉】
【～10/10(火)夏休み長期貸出図書返却期限】

【11/1(水)～ 通常貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限２週間以内）】
【11/3(金)〈文化の日〉、11/5(日)〈本学創立記念日〉、11/23(木)〈勤労感謝の日〉】
【11/10(金)〈六公立戦〉、11/22(水)〈推薦入試〉】

【12/1(金)～12/8(金) 通常貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限２週間以内）】
【12/23(日)〈天皇誕生日〉】
【12/11(月)～12/27(水)冬休み長期貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限:～1/18(木)）】
【12/28(木)～1/4(木)年末年始休館】

開館時間等		
通常開館	９：００－２０：００	
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	*全学休講日 (11/10、11/22)* *9:00－16:45*	*冬期休業 (12/25～1/10)* *9:00－16:45*
休館日	土・日・祝祭日・年末年始	

なからぎ京都府立大学図書館報　177号2006（平成18）年10月発行　編集発行人：野間正二
発行所：京都府立大学附属図書館　〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町　TEL 075（703）5129
FAX 075（703）5192　ホームページhttp://cocktail.kpu.ac.jp/toshokan/toshokan.html